



②

①



⑤



⑥

④



日本の BOAT のメンバーへの感謝状
 私たち、バンギの4区の首長達のグループは、本状によって、1年前から栄養失調の子どもたちを支えてくれただけでなく、子どもたちのために医療プランを実施し、衛生的な排水管理をしてくれた BOAT のメンバーに深く感謝いたします。
 このプロジェクトがなかったら多くの子どもたちが亡くなっていたことでしょう。経済的に困窮している親たちは、子どもに栄養を十分に与えてやることも、衛生管理をすることもできません。それゆえに、私たちが子どもたちに栄養を十分に与え健康管理をしてくれたこのプロジェクトは非常にありがたいものでした。ここに、心からの感謝をあなた方に捧げます。
 首長たちから友情をこめて



世界の最貧国のひとつ中央アフリカ共和国。BOATの「3カ月里親プロジェクト」は、現地の栄養失調児に対する栄養補助プロジェクトです。スタートから1年目を迎えた昨年夏、現地の首長さんから感謝状をいただきました。

ポ ー ト 学生国際 NGO BOAT の 「3カ月里親プロジェクト」

※学生国際 NGO BOAT:

2004年のスリランカ津波被災時に、長崎大学や長崎県立大学など長崎の学生たちによって立ち上げられた組織。四川大地震やミャンマーのサイクロンの被災地などでの支援をはじめ、途上地の慢性的な問題に取り組んでいる。

BOAT ホームページ http://www.geocities.jp/boat_students/ お問い合わせはEメールで受け付けています boatotoiawase@live.jp

■「3カ月里親プロジェクト」のきっかけ

アフリカ中央部にある内陸国、中央アフリカ共和国。「同じアフリカでも、国によって貧富の差があります。中央アフリカ共和国は、その中で最も貧しいといわれる国のひとつです」と話すのは、学生国際 NGO BOAT の千早啓介さん(医学部6年)です。

「3カ月里親プロジェクト」は、被災地の支援や途上地の慢性的な問題に取り組む BOAT の活動のひとつとして、2008年夏からスタート。内容は、バンギの栄養失調児に栄養補助としての給食を提供するもので、食材費は「3カ月里親」たちからの寄付金で賄います。この寄付金はひとり2,500円で、4カ月ごとに募ります。「金銭的、期間的に一人ひとりの負担が少ないかたちで参加してもらえるのが、このプロジェクトの大きな特長です」と話す千早さん。実は、このプロジェクトの発案者でもあります。



千早 啓介さん
 (医学部6年)

それは、2007年夏、バンギの診療所へ研修に行ったことがきっかけでした。「現地は貧富の差が激しく、貧しい人々は一日1食。それもあまり栄養価のないものを食べているようでした。多くの子供たちが栄養失調で病気がかりやすく、病気になるとう回復する体力がないため亡くなってしまう子供も少なくありませんでした。」「その現状にショックを受け、自分たちにできることを考えたとき、子供たちの栄養状態の改

- 1 食事をとる子供たちの笑顔がプロジェクトの原動力。
- 2 熱帯雨林が広がる首都バンギ。経済の低迷が続いている。
- 3 栄養補助を受けているバンギの子供たちや徳永瑞子先生(右端)と。
- 4 診療所の一角で、子供たちのお母さんが調理を担当。「子供たちは変わった味を嫌います。お母さん方が調理することは、慣れ親しんだ味で栄養補助を行うためにとても大切なこと」と千早さん。
- 5 「3カ月里親プロジェクト」への感謝状をくださった首長さんと磯道さん。
- 6 バンギの診療所で出産の補助も経験した千早さん。
- 7 「3カ月里親プロジェクト」を支えてくれている「アフリカ友の会」のスタッフのみなさん。
- 8 栄養補助の食事を受け、体重測定をする子供。体重のデータは里親さんたちに定期的に届けられる。
- 9 栄養失調が原因で、体がむくんだ子供が多い。
- 10 母親たちに栄養失調に関する啓発教育をしている。
- 11 現地では、トマトベースやコンソメベースの煮込み料理が多い。



善になら、何か力になれるのではないかと
思ったのです」。

「3カ月里親」の3カ月とは、栄養失調児
が、栄養補助を受け、体力を養い、再び成長
をはじめめる目安の期間だといえます。

**アフリカ友の会・
徳永瑞子先生との出会い**

そもそもなぜ、中央アフリカ共和国だっ
たのでしょうか。それは、徳永瑞子先生(聖母
大学)との出会いが導いたものでした。「アフ
リカ友の会」というNGOの代表でもある
徳永先生は、中央アフリカ
共和国で、HIV
エイズ感染拡大
防止やエイズ
患者、栄養失調
児、エイズ孤児、生活弱者



磯道 岳歩さん
(工学部2年)

の支援を長年、続けています。数年前、長崎
大学医学部保健学科で教鞭をとられてい
た時期があり、そのとき千早さんが徳永先
生のアフリカの話に関心を抱いたのがきっか
けでした。「アフリカ友の会」は、バンギに診
療所も併設した保健センターを設け、医療
から生活まで、現地の人々のさまざまな支
援をしています。2年前、千早さんが研修
に行ったのもこの保健センターの診療所で、
現在、「3カ月里親プロジェクト」の子供た
ちへの給食も、「アフリカ友の会」のスタッ
フの方々の協力を得て展開しています。

1年後、思いがけない感謝状

「3カ月里親プロジェクト」のスタートか

ら1年経った2009年夏、BOATの磯
道岳歩さん(工学部2年)が、現地へ赴きま
した。「到着して最初に言われたのが、この
プロジェクトがはじまってから、亡くなる子
が減ったとか、元気で走り回る子が多くな
った、というもの。実際に私もそういう光景を
目にする事ができました」と磯道さん。

元気な子供が増えたとはいうものの、や
はりそれはほんの一部。磯道さんもまた、
栄養失調児の厳しい現実を目にしました。
「成長が止まり、実年齢よりも体が小
さい子、タンパク質の欠乏でむくみ、元気が
なく無表情の子などが、まだまだたくさんま
す」。

磯道さんが印象に残っているのは、栄養
状態のひどく悪い子が、自分に差し出され
た食事を、別の子にも分け与えている姿で
した。「その子だけでなく、現地の人はみな
優しい。生活環境は厳しいけれど、バンギで
過ごした2週間、とても楽しかった。バンギ
の人々は喜怒哀楽をストレートにぶつけて
くる気持ちのいい人たちなんです」。

研修を終えようとしたある日、思いがけ
ず、地域の首長さんからのプロジェクトに
対する感謝状をいただきました。磯道さん
は手応えを感じ、大きな励みになったとい
います。今後も多くの中親さんたちと中央
アフリカの子供たちとの出会いの繋ぎ役と
して頑張っていきたい。そして、千早さん
も「海外に対して何か支援をするということ
は、実はそんなに難しいことはありません
興味のある方は、ぜひ一緒に活動しま
しょう」。BOATは、これからさらに仲間
を増やし、息の長い活動をめざしています。